

「環境保全を頑張っても、地域の人にお金が入らない」を解消する「鹿島モデル」誕生の背景

環境省ローカル SDGs 地域循環共生圏セミナー2024

第1回講演編 開催レポート

環境省では、地域の環境・経済・社会を良くして地域を元気にしたいと考える人たちが、一歩を踏み出す「きっかけ」や「学び」を得るためのセミナー「環境省ローカル SDGs 地域循環共生圏セミナー」を開催しています。

第1回講演編では、鹿島市役所の江島 美央さんをお招きし、「持続可能なまちづくり～鹿島市のローカル SDGs の取組～」をテーマにお話いただきました。

その内容をレポートします。

江島 美央 (えじま・みお) さん プロフィール

- 鹿島市役所 政策総務部ゼロカーボン推進室室長補佐 兼 広報企画課 課長補佐
- 1974 年長崎市生まれ。熊本大学文学部史学科卒。
- 2003 年に鹿島市役所入庁。2016 年にラムサール条約推進室に配属される。2015 年に有明海の干潟の一部がラムサール条約湿地に登録されたのをきっかけに、環境省「地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業」に申請・採択。環境と産業の調和を目指す取り組みを始め、地域の環境・社会・経済の課題を同時に解決するローカル SDGs 事業創出プラットフォーム「鹿島モデル」を構築した。
- 2024 年ゼロカーボン推進室、広報企画課に異動。脱炭素と SDGs の担当となる。

江島：鹿島市は佐賀県の南西部にある、自然豊かな町です。有明海の干潟に囲まれた小さな市で、人口は 2 万 7000 人です。祐徳稲荷神社が有名です。干潟で行われる運動会「ガタリンピック」や、市内の酒蔵が一斉に開かれる「酒蔵ツーリズム」などのイベントがあります。

2015 年に有明海の干潟の一部がラムサール条約湿地に登録されたのをきっかけに、2016 年から環境省の提唱する「地域循環共生圏づくり」の取り組みをスタートしました。ローカル SDGs を推進し、環境と産業の調和から有明海の再生を目指しています。

これまでの主な取り組みは以下のとおりです。

- 2021 年 3 月：肥前鹿島干潟 SDGs 推進パートナー制度設立（現在 95 団体が登録）
- 2021 年 4 月：金融機関 5 行と連携協定締結（ESG 金融）
- 2021 年 9 月：「佐賀新聞社」と連携協定（報道に関する協定）

- 2022年9月：「ゼロカーボンシティ宣言」表明
- 2022年9月：「日本工営」と連携協定（自治体SDGs診断モデル都市）
- 2022年10月：「九州電力」と連携協定（エネルギーに関する協定）
- 2023年5月：クローズドリサイクルを目指し、「バイオマスレジンホールディングス」と連携協定
- 2024年1月：サントリーホールディングスとペットボトル水平リサイクルを進める協定

こうした取り組みが実を結び、2022年度には、環境省グッドライフアワード「環境まちづくり賞」受賞、国土交通省「グリーンインフラ大賞」受賞、内閣府「地方創生SDGs金融表彰」受賞と、三冠を達成しました。また、2023年度には内閣府「SDGs未来都市」に選定されて、環境省の脱炭素の重点対策加速化事業実施地域に選定されております。

地元の人の心を置き去りにしてしまった、ラムサール条約へのスピード登録

江島：有明海では災害・赤潮・貧酸素水塊が頻繁に発生し、生き物がどんどん減少しています。例えば、一度アゲマキガイは全滅しており、2018年にアゲマキガイ漁を解禁したものの1年でまた獲れなくなっていました。

また、有名な有明海の花も、2022年以降例年のない不作が続いています。海の栄養分が少ないために赤い海苔が取れるようになっており、栄養のある黒い海苔ができてほとんどカモに食べられてしまうという状況です。

こうした背景には、市民の環境や干潟への関心の低さがあると考えています。

干潟がラムサール条約に登録されていることについては、ほとんどの市民が知らない状況でした。「肥前鹿島干潟」は、ラムサール条約登録のための活動をはじめから、一年以内にスピード登録されています。つまりこれは、地元との調整に時間をかけていないということでもあり、地元の人の心を置き去りにしてしまったということだと捉えています。

私たちラムサール条約推進室のメンバーは、当初関連イベントを開催することを地元のためなことだと思って取り組んでいました。しかし、これが地元の人からすごく怒られてしまいました。ラムサール条約に登録されたからといって地元で1円でもお金が入るわけでもないのに、「はい、草刈りをやってください」「花火大会やるから交通係をやってください」と依頼をしていたので、地元で負担がかかっていたんです。私たち市役所の職員は残業代が出ているのに、市民の人たちは全部ボランティアでやっていたので、負担に思うことは無理のないことです。これが最初のボタンの掛け違いでした。

ラムサール条約や干潟について知ってもらうこと、地域の人にお金が落ちる仕組みをつくること、これが環境のためにも、地域のためにも重要なことでした。

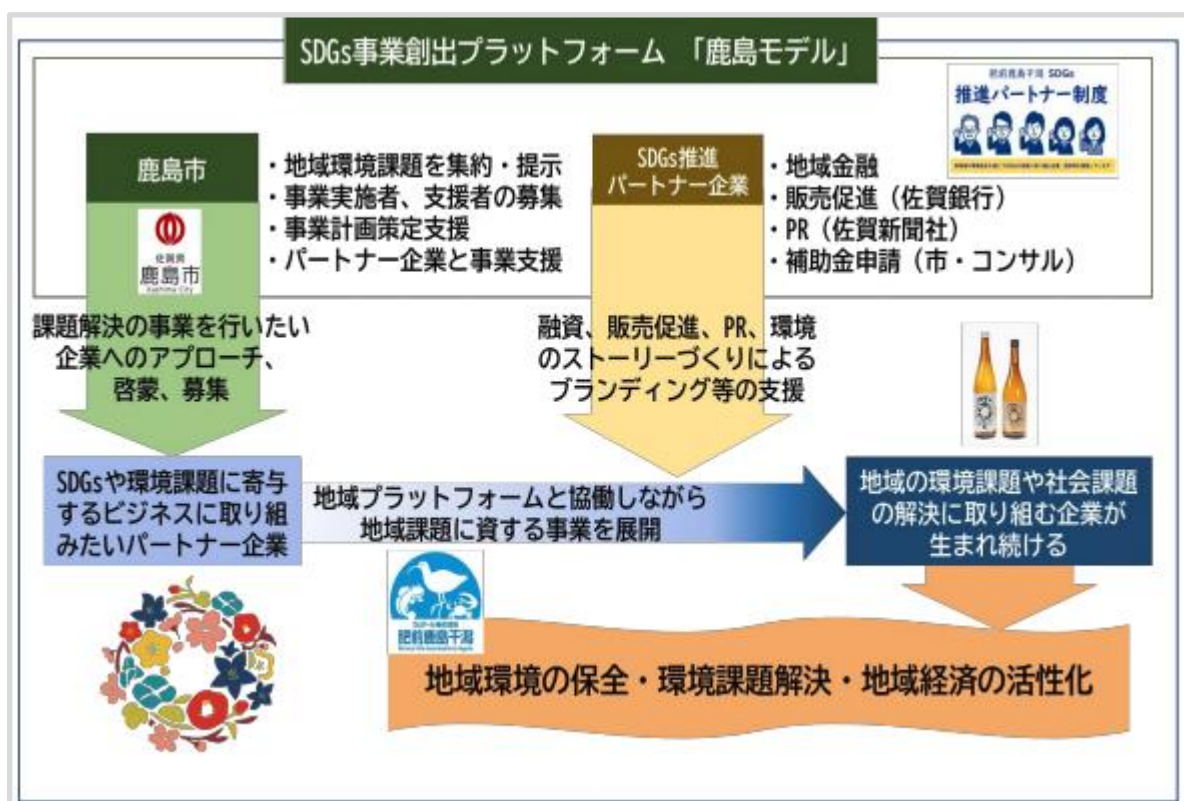
江島：こうした取り組みをしている間にも、気候変動の影響で毎年豪雨による土砂災害や浸水被害を受けています。市民の安心安全な暮らしや、干潟など貴重な生態系への影響が出ています。

いよいよ、行政だけの取り組みでは手が足りないと考え、そこで生まれたのが「肥前鹿島干潟 SDGs 推進パートナー制度」と「鹿島モデル」です。

「肥前鹿島干潟 SDGs 推進パートナー制度」には現在 91 社の登録があります。最初の 50 社に対しては、自分たちで直接営業活動を行っています。それ以降は、地域循環共生圏の取り組みの知名度があがってきたこともあり、「環境が壊れていく中で、自分たちも何かしたい」という企業さんが自発的に応募をくれるようになりました。

この「肥前鹿島干潟 SDGs 推進パートナー制度」が、「鹿島モデル」の基礎になっています。

「鹿島モデル」ではまず、年に一度 SDGs 推進パートナーの企業を集めて会議をします。そこで、鹿島市の環境課題と取り組みたい事業を共有し、一緒に取り組む企業を募集します。そこでマッチングしたものは、市が支援を行います。また、事業が終わったあとは、その事業が環境にどれだけインパクトを与えたのかを数値で測定し、フィードバックします。



事業化支援と環境評価の二つの柱が鹿島モデルの肝です。これを回していくことで、環境に資する事業が生まれ続け、地域の環境課題解決・地域経済の活性化に繋がる仕組みになっています。

環境評価指標は、施策から具体的なアウトカムを導き出せるような形になっています。これを踏まえて、協力企業が自社の CSR 活動として IR などでも報告することができるようになっています。

「鹿島モデル」から生まれる、多様な事業

江島：この「鹿島モデル」から生まれた事業が、3年後の鹿島の環境を守る酒「ごえん」です。「グリーンインフラ大賞」を受賞しています。

この事業は、棚田を保全しグリーンインフラとして活用することで、豪雨時の土砂災害や水害を防止することを目的にしています。

現在鹿島市で棚田でお米をつくっている人たちの平均年齢は **75 歳**以上です。利益が出る仕組みにしない限り、棚田を保全することはできません。そこで、利益を出すために、棚田でできた食米をつかって日本酒をつくることにしました。

「SDGs 推進パートナー制度」である酒蔵に声をかけたところ、二つの蔵が手を挙げてくれました。こうしてできたのが「ごえん」です。ラベルは、取り組みに賛同してくれたデザイナーさんが、ほぼボランティアでデザインしてくれています。

今は、鹿島市からの支援はゼロで事業として成り立っています。

また、地方創生 **SDGs** 金融表彰を受賞した事例として、荒廃したみかん園と放牧牛のプロジェクトがあります。

これは、みかん畑の再利用・イノシシの食害防止のために始まったプロジェクトで、経産牛をみかんの荒廃園に放牧しています。また、その経産牛をつかった食品も加工・販売しています。これまではやむなく他県の加工場にと殺・加工をお願いしていましたが、鹿島市の食肉加工会社の協力を得ることで、輸送コスト・CO2の削減も実現しています。

また、この牧場は太陽光エネルギーと ICT の技術を活用して餌やりなどをしており、こうすることで農家の方の労働時間を短縮しています。



また、カモによる海苔の食害に対して、LED・ドローンを活用したカモの誘導実験を行っています。

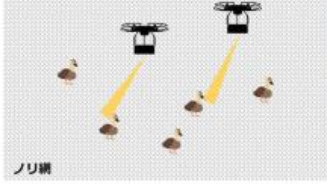
海苔を生業にしている人からしたらカモは全滅させたい存在ですが、自然保護の観点からするとカモはなるべく殺したくない。これを解決するために始めたのが、LED・ドローンを活用したカモの誘導実験です。ドローンを飛ばしてLEDで光を当てることで、昼でも夜でもカモが別の場所に移動する効果があります。

この実験で使っている光を干潟のライトアップに使い、市民への啓発につなげるイベントも開催しています。

産業と環境の調和の象徴となる事例と言えるのではないかと思います。

ドローンに高出力のホロライトを搭載して光を照射する

実験機材③：高出力ホロライト(1点ドット)
特徴：従来のホロライトよりも明るい光



また、他にも「紙おむつリサイクル事業」「お米のプラスチックづくり事業」などに取り組んでいます。

いまは広報にも力を入れており、集英社の **MORE** と連携して、鹿島市の豊かな自然から育まれた紙パック水のラベルを、鹿島市らしいデザインにして流通させる取り組みを行っています。こうした取り組みを通して、鹿島市のシビックプライドの醸成や、鹿島市の取り組みの **PR** をしていきたいです。



MORE
JAPAN



行政だけでやるのではなく、企業を含めた仲間を増やすことが大切

江島：はじめは住民の声を聞くことが不十分だったことによるボタンの掛け違いからスタートしましたが、対話を重ねる中で、環境にも経済にも良い事業を生み出し続ける「鹿島モデル」が生み出されました。

実は、地域循環共生圏・脱炭素・SDGsを専任で担当しているのは、私1人です。そんな中でも回すことができているのは、企業と連携しているからこそだと感じています。毎年暑くなっていく気候から地球温暖化を肌で感じたり、魚が全然取れなくなったり…。こうしたことに危機感を感じている方に仲間になっていただいています。

環境に資する事業を生み出し続け今ある環境を少しでも損なうことなく次の世代に伝えること、それをする仲間を増やすことが、自分たちの使命だと思っています。また、環境に良いことをして自己満足で終わるのではなく、きちんと数値化することも大切だと思っています。

「鹿島モデル」を通った事業の利益の一部は、肥前鹿島干潟基金を通して有明海保全のための活動に使われるようになっていきます。モデルが発展するほど、地域にお金が入るようになっていきます。「地域の人が環境保全のために頑張っても、地域の人にお金が入らない」最初のボタンの掛け違いは、「鹿島モデル」によって解消されたと言えると思います。